



三陸河北新報社
〒986-0827
石巻市千石町4-42
電話 0225-96-0321
FAX 0225-21-1668
気仙沼支社
〒988-0071
気仙沼市新町1-11
電話 0226-23-3254
河北新報メディアセンター
〒980-8660
仙台市青葉区五橋1-2-28
電話 022-211-1551
三陸河北新報社のホームページ
www.sanriku-kahoku.com/
© 三陸河北新報社 2011

半年前の3月11日に、私はすべてを無くした。それまで生きてきた過去を、歴史を、断ち切られた思いだった。命があっただけ良かったと、多くの人が言ってくれた。だが、今だから言わせていただく。これから生きていく自信がないと、どれほど多くの被災者が、つぶやいたことだろう。

不気味な揺れ

2時46分、私は石巻市街にいた。今まで体験したことのない不気味な揺れに、私はその場にしゃがみこんだ。店員の悲鳴に我に返った私の手を、夫がつかんだ。「行くぞー」ドアのすぐ外に止めていた車に飛び乗る。ラジオをつける。大津波の警報が出ていた。なのに。夫は車を自宅に向けた。...え？わが家は海沿いにある。道路を一本横切れば、すぐに堤防。



寄稿

「あ。私、笑えるんだ」

作家 阿部 邦子

山道に入り、茨浜に差し掛かった時だ。前を走っていた車が突然止まり、バックして来ながら運転手が叫んだ。「戻れっ、津波だ、戻れっ！」夫が車を戻した。その数分先を、右から左へがれきの山が、すごい勢いでなだれ込んできたのだ。「山道に入れば大丈夫

まで、見ないほうがいい」多くのボランティア、医師、自衛隊、警察隊、マスの写真など、ラミネートまじりのコミ等々の交渉や情報交換を、すべて私が担当することになったのだ。とにかく忙しかった。複数の団体と、並行して話すなど当たり前で、昼食をとれない日も続いた。あまりの疲れに不眠となった。何

と云ってくれた。自衛隊と警察隊は、「邦子さんに会えただけと溶けた気がして、す」と言ってくれた。F県警の警察隊が、任務終了の挨拶(あいさつ)に来てくれて、私の前に整列をして、隊長が言った。「邦子さん、感謝を込めて敬礼ー」と自分の心の推移を、作家「感謝するのは私のほうだよ」、そつ言いながら、私は顔をくしゃくしゃにして

と思っただのに。まさかこんな所まで「夫がくしゃくしゃに悔しそうに言葉を吐いた。高台に車を止めた。雪が降ってきた。寒かった。車にあまり、ガソリンはなかった。

2カ所、避難所をまわって、地震から8日後に、地元、十八成浜によつやく戻れた。「もつ少し落ち着くし多忙なN氏に代わって、

もかも失った喪失感も、不眠の原因ではあったろう。ボランティアや医師団の真摯(しんし)な問いに、精いっぱい答えながらも、私は虚(むな)しかった。長い時間をかけて集めた蔵書たち。母の形見の貴金属たち。パソコンとともに、書きかけの作品たちも消え失せた。両親と私、夫と舅、ボランティアは、「ただいま」

あへくじさん 1950年、仙台市生まれ。尚絅学院卒業後、仙台サインスクールで学ぶ。79年から石巻市十八成浜で夫の栄悦氏と民宿を営む。傍ら執筆活動に情熱を注ぐ。子宮外妊娠、乳がん、と幾度となく重い病を患いながらも前向きに生きる姿勢が読者の共感を呼んできた。

リーダー補佐

十八成浜の避難所で暮らすうちに、いつしか私は、薬の保管責任者のほかに、スポーツスマンの役割も担っていた。支援助資を責任

持って、皆に平等に配布する、避難所のリーダーのN氏が、私を補佐にと指名

感謝の気持ち

そんな私なのに、邦子さんがいてくれるから情報が得やすいと、訪ねてくれる人たちが、言ってくれた。毎週土曜日に、百人・二百人の態勢で来てくれるボランティアは、「ただいま」

主な作品に「つみべの小さなおきくさま」(理論社)、「マンマ質問箱」(日総研出版社)など。

石巻かほくには「おれは海の子」十二支の童話集「方丈さんものがたり」キョーホー館へようこそ「まなごし」の5作品を連載。講演の依頼も多い。

民宿は東日本大震災で被災。現在、十八成浜の仮設住宅に暮らす。